

# 子どもの遊びと造形表現



林 健 造

## ○子どもの遊びから

子どもの生活の本体は遊びであり、遊びを通してのみ多くのものを学びとるのでということではフリーベルが教育的な価値を積極的に認めて以来、今日まで定説として誰もが疑わないところであろう。すなわち、遊びを仕事と対立させるのではなく、価値ある仕事へ発展するための萌芽として、教育的価値を認めているわけである。ソ連のマカレンコもまた

「遊びは子どもにとって外界を認識していくための重要な手段であり、外界に対する彼のかかわり方の表現である。」

として、子どもの遊びの価値を定義づけている。

その遊びも、表現の形式によって分類してみればいくつかに分けることができよう。

ビアジェの分け方にならえば、リズム的表現・装飾的表現・構築的表現・模倣的表現・对人的表現・蒐集的活動などに分けられようが、いずれも、子どものもつてうまれた本能的なはたらきの表われである。

また、子どもの活動の実際の表われ方の面でもらえてみれば、

・かく・ぬる・ひっかく・貼る・ほる・くつつける・ちぎる・組む・まげる・丸める・こする・ならべる・押しつける・切る・つなぐ・結ぶ・積む・くずす・曲げる・などの分類もできよう。

実際の子どもの遊びは、これらの分類の形が単独で表われることよりは、いくつかが組合わされた形として表われるのが普通である。

例えば、幼児が庭の色づいた落葉を拾いあつめて、こんどはそれをいろいろ並べて遊んでいる。何か小さい声で歌を唄いながら、そしてその拍子にあわせて体を左右に動かしながら……。というよう

な風景は、どこでもしばしばよく見られるものであるが、これなどは、落葉を集めるという蒐集活動、(実際、隣にいる子が数枚あやまっつてその子を使ったりと、が然怒りだすほどにだいたいな蒐集物として持っているものであるが)それを並べたいという装飾的表現と並べていくうちに、木の葉の大小や色彩のリズムから、刺戟されて歌を唄い、体を動かすというリズム的表現とがミックスされたものであるということである。

ついでながら、このように、体全体を動かしながら学ぶ、体全体で感覚でつかむというやり方は、子どもの大きな特徴であり、造形表現のねらいなども、大いにこの点にかかわりあいをもっているものである。

例えば、子どもはよくいう、

「先生、走っている人かけないよう。」

そんなときに

「走っている人はね、よく先生の体の動きを見てごらん。ほら、手はこうだろう。」

という指導よりも

「○○ちゃん、そこで、ちょっと走ってごらん」

といて、その子の体を動かしてやったほうがはるかに解るといったことがしばしばあるものである。

ちよっと横道にそれだが、子どもの遊びはいくつかが総合された

ものであるという例では、とくに女の子の場合など、顔にお化粧をしたり、髪に何かをつけて飾ったりすることをよくするが、あれなどは母親が鏡に向って化粧しているのを傍でみて、それを模倣したいという欲求ともう一つ自分も飾りたいという欲求の表われと見ることができるところから、模倣的表現プラス装飾的表現というわけである。

幼稚園の積木遊びは、絵画製作に入るのだろうか？ というような質問にであることがある。幼児がする積木遊びには、少なくとも三つ位の段階があると思う。

その一つは、機能的快楽といわれるもので、ただ積むことがおもしろいとか、積んだものをガラガラと崩すことがおもしろいという段階である。

次は、何かの形に似せて作るという段階で、働き自体としてはたいへん創造力を必要とするわけで、おそらく積木遊びの主なるねらいや活動の中心となるものであろう。

「ほらテッキョウができたよ。」

「こんどはお家を作ろうかな。」

といった活動はそれである。

ところがもう一つの段階がある。それは機能的なものへの興味段階である。ここの機能的などというのは、先に述べた機能的快楽とはちよっと意味の違うもので、自動車なら走るといふことが一つの

機能であるといったものである。

したがって積木でも、直方体の積木をもって、口でシュッシュポ  
ーなどといっている段階から一步進んで、何とか本当に走らないか  
なあと考えて、丸棒をコロにして、その上に直方体の積木をのせ、  
自分がそれにまたがり、コロリとでもその積木の自動車動いた時  
の驚きは相当なもので、

「ボク動く自動車作つたよー。」

などと小さい胸をはずませて喜こんでいる。

つまり、ここでは積木の丸棒を利用して、動くという機能を発見  
したのでから、先の二つの段階と違うものであるといえよう。いま  
積木遊びに例をとったが、機能をもっと具体的にするために粘土遊  
びを例にとってみよう。

子どもたちが粘土でたのしそうちにままごと遊びをしている。

「先生ッ、ごちそうできたよ。今もっていつてあげますよ。」

と木の葉をお皿にして、粘土で作ったごちそうをのせてそろそろ歩  
いてくる。と、途中で無情にもごちそうは皿からころげ落ちてしま  
った。

「やっぱり木の葉のお皿はだめね。」

とその子はひっかえす。

「こんどは先生大丈夫よ。」

なるほど、こんどは粘土で鉢を作つて、その中に入れてある。

機能とはつまりこれである。平面の木の葉よりは鉢形の方がもの  
がこぼれおちないという器の機能に気づいたわけである。

だから私などはビアジェの遊びの分類に、機能的表現とでもいっ  
たものを一枚加えたらどうかとすら思うわけである。

### ○造形の領域から

ところで一方指導面の角度から造形活動の領域といったものを眺  
めてみよう。

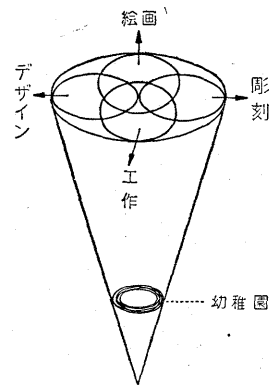
従来までは、造形の領域を平面的な活動は絵画、立体的な活動は  
製作という分け方をしてきたのであるが、今日ではそのような単純  
な分け方では満足できない。それだけでなく第一解決がつかないと  
して、心象表現を中心とした領域と、機能表現を中心とした領域と  
に分けるような方向で考えなおされている。

したがって、版画やはり絵など広いジャンルでの絵をかくような  
仕事や、粘土で人や動物を作るようなものはすべて心象表現の領域  
として考え、デザインや工作のようなものは、ある機能(はたらくき)  
や目的にそつて作られるものであるので機能表現の領域に入れて考  
えられるわけで、この方が確かにすつきりしていて解りよいと思わ  
れる。

今度新しくできた「幼稚園教育指導書」では、いろいろな点で新  
しい努力は試みられているが、この領域の問題では、相も変わらず

従来までの平面的なものは絵画、立体的なものは製作という考え方から一歩もでないことをたいへん遺憾に思うわけである。

ところで幼稚園の場合などはどうかというと、絵画・彫刻・デザイン・工作のような領域がはっきり分けられるものでもなければ、分けて取り扱うべきものでもない。例えば逆円錐形の中にその四つの領域を頭からおしこ



んだようなもので、円錐の頂点に近いあたりではこれらの造形の領域が三つ輪石鱈の商標のように四つ深く重なりあっているというのが本体であろう。

したがって将来は分化するかもしれないそれぞれの萌芽もった全体的な造形活動であることを教師は承知してかかることが最も大切なことであろう。

ただそれぞれの子どもの造形活動や、造形的な発想がこれらの領域とどのようなつながり方をもつ働きかが見出せる眼はもっていることが必要であるといふことは言えよう。

そうでないと、例えば絵だけの指導に偏った角度からは、画用紙にかいた絵に穴をあけてすけてみえるとか、窓が開く絵をかいた

よというような、デザインの的にはすばらしい発想でも、絵にそんなことをしてはいけませんということになりかねない。

### 〇二つのもののかかりあい

今まで子どもの遊びの面からと、次に造形の領域の面からと眺めて話を進めてきた。この二つのもののかかりあいの中に、子どもの造形の指導がうまれてくるわけである。

子どもの造形学習というのは遊びを中心として学習していくことがより効果的である。したがってこの頃では、とくに作品の結果よりも、遊びの過程が重視されなければならないといわれるのもそのためである。

しばしば何かよい題材はないだろうか。昨日も今日も好きな絵だけでは困ってしまいます。という質問をうけることがある。そしてそれは案外に多い数である。仮りに一つの新しい題材を与えても、おそらくその教師は二、三日すると再び同じような立場でこまってしまうに違いない。

そこで教師が創造的で次々に題材をうみだせる場合はともかく、一番よいことは、子どもに教わることである。教わるというのは、子どもたちの遊びから教わることである。その遊びをよく観察し、どのようなことに興味をもって遊んでいるかとか、子どもたちのポケットには何が入っているのかなどよく調べてみる必要があるであ

る。

彼らがポケットにもっているビー玉一つにしても、石ころ一つでもまるで宝物のように大事にしているものである。ビー玉は砂場でトンネルを作るところがすどきに絶対に必要なのであり、名もない石ころは「亀に似ている石」といって大事にしているといった具合である。

私にもこんな例がある。

ある晴れた日、庭にでて子どもたちが「血が見える、血が見える」と叫んでいる。

よくきいてみると、太陽の光に両手を透してみると、指と指との間が赤く見えるので血が見えるといっているわけである。

かつては私も子どもの頃にこうして驚いた経験をもっているが、今子どもたちの叫びをきいて改めて「そうか、そんなに透けてみえるのが驚きなのか」と考えさせられた。そこで「すかして見る絵」という題材を早速やってみた。つまり何のこともない普通のザラ紙に画用紙で作った形を貼り、それを裏から光にすかして見るといいうものである。

何の変テツもないこのようなことが、結果としては「血がみえる」「遊びのあの感激と同じことが再現し」「先生ホラ見えるよ、見えるよ」とたいへんな驚きようであった。

## 〇 ま と め

さてまとめにあたって、もう一度子どもの遊びを復習してみよう。子どもの遊びは実際の表われとしては総合体で表われているが、先の分類で述べたように、それぞれ点としての要素をもっていた。

次に子どもの造形活動の領域もまた、全くこれと同じ形式で、実際の表われ方としては総合体であるが、点的要素としては、絵やデザインや工作や芸の領域につながる萌芽をもっているとみることが出来る。したがって、それはそれで、実際の指導にあたっては総合体として扱っていいのであるが、教師は遊びについても、またその遊びの形で行なわれる造形活動についても、その点というか要素というかそれを見分けられる眼をもつことが必要だと思わなければならない。

いふなれば、教師はいくつかの眼鏡をもっていて、絵だけの眼鏡でなく、ある時はデザインの芽をみつけだす眼鏡とか、機能的表現の芽をみつけだす眼鏡とかをいろいろもっていることの必要性をいいたいのである。

このことよって、子どもの造形的な萌芽を多角的にひろいあげることができるといふものである。いろいろな角度で子どものよさを認めてやれるということは、子ども自体にとっても、またどの子どもどの子も何か伸ばしていかうと指導する教師にとっても、すばらしく楽しいことではないだろうか。